

## 短編小説づくりへの挑戦 そのⅡ

# The Challenge to write the short stories II

中 村 国 男

NAKAMURA Kunio

キーワード：短編小説、創作、学生

Keywords: short story, write, student

小説を書いた経験のほとんどない学生に短編小説を書かせたら、どれぐらい書けるのだろうか。また、指導を受けたらどれぐらい力は伸びるものだろうか。日本語日本文学科の「創作の心理」という授業は、まさにその実践研究の場である。1年前、私は紀要第48号において、この授業におけるある学生のレポートを中心に紹介しつつ、その指導法を紹介し、指導の在り方を論じた。しかし、残念ながら紙幅の関係で、学生の初期の段階しか紹介ができなかった。そこで、今回はその続編として、学生その後の成長ぶりを紹介し、併せて学生たちの創作力を育成する指導法の一部を示す。これらを通して、学生たちの陥りやすい誤りや、その指導法を読者諸氏と共有できることを願っている。

## 短編小説づくりへの挑戦 その二

中村 国男

はじめに

一年前、私は常葉大学短期大学部紀要第四十八号に「短編小説づくりへの挑戦」と題する論文を掲載させていただいた。その中で、自ら志して小説を書いてみた経験など皆無に近いという短大の一年生がどれほどの創作力を持っているかを紹介し、どういう指導をすればどれほどその力が伸びるのかを私なりに論じた。特に年度初めにおいては創作力の極端に乏しかった学生Aのレポートをしばしば引用して、その実態を理解していただいたつもりである。

学生Aは一回目の授業のレポートでは、A4版横長のレポート用紙に約三十分でわずか七行しか書けなかった。二回目のレポートでは十二行に増えた。三回目の授業で、「時間崩し」と「視覚以外の聴覚・触覚表現の使い方」を指導したところ、いきなり四十二行も書けるようになった。

ただ、残念ながら紙数の関係で三回目のレポートまでしか紹介できず、その後学生Aがどのように見事に成長していったかを紹介することができなかった。今回はこの部分を紹介し、学生が陥りやすい失敗も包み隠さず紹介しつつ、最終的には学生Aの成長を見届けていただきたいと考えた、

学生たちには、四回目から十四回目の授業まで十一本の超短編小説を書かせた。十五回目すなわち最終回の授業では、今まで授業で

書いて提出した自分の作品から最も改良したいものを選び、それをリニューアルして提出させた。

この論文においては学生Aの中盤の作品として六回目、七回目のレポートと、終盤の作品として十一回目、十三回目のレポートの注目すべき部分を抜粋して紹介しつつ論を進めることとした。

## 第六回授業 室内の状況を描く

夏目漱石の「三四郎」「こころ」の一節を読み、家屋特に室内の状況の描き方を学んだ後、次のようなお題で創作させた。持ち時間は三十分。ただし、希望者には宿題として持ち帰り、翌日午後一時までの提出を認めた。学生Aは翌日提出した。

## 資料1 第六回授業 レポートのお題

お題 私は七十歳のお婆ちゃん。久しぶりに孫の太郎のアパート近くに行くことになったので、「ついでに家庭料理の一品も作ってあげるわよ」と電話して、やって来たところ。太郎はここにこと招き入れてくれたのだが……。お婆ちゃんの長年の勤はごまかせないわよ。夕べあたりだろう。この部屋には間違いなく若い女性がいたはずだ……。適宜設定を補い、

この状況と二人のやりとりを描写せよ。  
条件①お婆ちゃん目線で描く。

② 部屋の状況とお婆ちゃんが気付いたシーンから描く。  
③ 太郎の反応を描く。

このお題のねらいはいくつかあるが、特に次の①のねらいは小説創作上の極めて重要な事項である。

- ① 語り手を誰に定めるか。目線人物を誰にするか。そして一人称小説とするか、三人称小説とするか。第一回のお題では日記や随想風に書きやすい「私」を主語にしたお題を出した。その結果、全ての学生が「私」を語り手として創作した。しかし第二回では大学に入学して間もないA子を主語にしたお題を出した。すると学生たちは、大学に入学して間もないという、自分とそっくりのA子を自分に置き換えてしまい、「私」を語り手として創作してしまうのである。この点については昨年も触れた。小説を読む際に作者が誰を語り手に設定しているかを吟味して、その効果の成否を問う読み方ができていない。だから自分が書く番になるとお題を無視して、放っておけばすべてのレポートを「私」目線で書いてきてしまう学生も出てくるだろう。そこで第三回においては、わざわざ条件①で「目線」という用語を示し、口頭で補足説明もして、今までの各自の失敗に気付かせるのである。
- ② この日に模範文として学習した夏目漱石は、あたかも建物配置図や室内の間取り図を書いてから小説を書いたのではないかと言われるほど、これらの描写に長けている。中でもここぞという場面を選んで学生たちに読み味わせた。その成果を生かせるかどうかを問う。お題で要求されているのはワンルームマンシヨンの

ような学生の下宿部屋の状況だが、若い男の一人暮らしの部屋をリアルに描くことはまだ十代の女子学生には困難である。

- ③ お婆ちゃんが部屋に残る女の気配を察知した場面から描かせる。第三回の授業で教えた「時間崩し」の復習である。特に今回のお題では、お婆ちゃんが太郎の下宿を訪ねるシーンから書く者が続出して、せっかくなかった手法がすっ飛んでしまう恐れがある。しかもこのお題には推理小説における「アリバイ崩し」のような魅力がある。作品の前の方で証拠を発見させ、問題の人物に証拠を突き付けて、真実を認めさせ、その経緯や意図などを白状させるという小説の醍醐味を是非とも経験してもらうためには、時間崩しを使わせたい。

- ④ 太郎の反応 過去において、お婆ちゃんの独壇場小説になってしまい、太郎の影が極端に薄いレポートを寄せる学生が何人もいた。長々とお婆ちゃんの独演が続き、最後で太郎が事実を認めるというのでは、数学の証明問題を解いているような作品になってしまう。一方、お婆ちゃんの一言ですぐに太郎が降参してしまい、あっけなく小説が終わったのでは超短編小説どころか超超短編小説となってしまう、目も当てられない。お婆ちゃんの追及に様々な表情を見せ、何かと理屈を付けて抵抗する太郎の存在が、お婆ちゃんの存在感に負けない作品を作らせたい。

- ⑤ 第四回のお題で学生たちは四十歳の主婦を描くことを経験している。今回初めて老人を描くことに挑戦する。女子学生にとって書きやすいように老女を設定した。台詞や描写に太郎との性差、年齢差がおのずと表現されるような創作を狙わせている。

第六回授業 お題に対するレポート

では資料1のお題に対する学生Aのレポートについて、冒頭部分をまず紹介しよう。

資料2 学生Aの作品 冒頭部分

数か月ぶりに孫の太郎が一人暮らしをしているアパートを訪れました。  
 玄関の先には六畳ほどの洋室。そして部屋に入った左奥に隠れるようにして一、五畳程のスペースにシンク、コンロ、冷蔵庫がびたりとありました。余計なものがなく、一見片付けられているように見えます。しかし、廊下には長い髪の毛が落ちており、シンク上の吊戸棚には無造作に片づけられた来客用のコップが一つありました。

どんなシーンなのか、まず全体的な状況を心の中でイメージしたのだろう。それをそのまま第一段落に書いてしまうところが初々しさでもあり、未熟さでもある。

まず評価すべき点。

① 部屋のサイズと、申し訳程度に付属した台所スペースの広さがワンルームマンションらしさを出している。コンビニに置かれているアパート情報誌の間取り図でも見たのではないかと思えるほどの出来栄である。なお、トイレと風呂については、レポートのもう少し先の方で出てくる。

② 「余計なものがなく」というさりげない描写の効果。食器や調

理器具も最低限のものしかないのが男の一人住まいである。ましてや冷蔵庫や戸棚にも何のアクセサリも付いていないのだろう。短い描写で男の学生「下宿生活を表現できている」。

その一方でいくつかの問題点が目立つ。

① まず「お婆ちゃんが気付いたシーンから描く」という条件を厳密には満たしていない。第一段落はいかにも小学生の作文のようで未熟である。創作力のある学生なら「あらっ、これは何かしら」というお婆ちゃんのつぶやきなどからスタートするところである。

② 廊下という語句がワンルームマンションらしさを消してしまっている。廊下があったのでは四大家族用のマンションを想像してしまう。ワンルームマンションは玄関のドアを開ければすぐ部屋だ。「床」とか「キッチンスペースの床」で十分である。

③ シンク、コンロ、冷蔵庫がびたりとありましたという表現の懸念さと未熟さ。狭いスペースにギュッと詰め込んだように並んでいる有様を描写したいというひたむきさが伝わってくる。この冷蔵庫も一般家庭のものと比べればかなり小さいはず。「・・・小さな冷蔵庫がびたりとはめこまれたように並んでいました」などと改めたい。

④ 廊下に落ちていた長い髪の毛。たとえ長い髪の毛であっても、立った姿勢から床の髪の毛に気付くのは難しい。お婆ちゃんが何らかの理由で座るか腰を屈めるかしくては、髪の毛の発見のリアリティが出ない。また、髪の毛を発見した時のお婆ちゃんの驚きも全く描かれていないのはもったいない。調理に使う鍋かフライパンを出そうとして、お婆ちゃんがシンクの下調理器置き場

のドアを空けようとした時に髪の毛を発見したという設定にすればよい。

⑤ 無造作に片づけられた来客用のコップ。太郎のコップは朝食か歯磨きの際に使って、まだ食器用のザルか何かに入っているのだろう。しかもそれは使い古して水垢のついたコップなのだ。一方来客用は一目でそれと分かるような毎日使わないものだ。きれいな花柄でもついていたのかもされない。来客用のことさらに表現したところに工夫が見られる。ただし、無造作に片づけられたというのはちぐはぐな印象を与える。「無造作に置かれた」ぐらいの方が、夕べ使って今朝片づけたばかりという印象が増してよい。

第六回の授業に至って、学生Aの力量は未熟ながらも着実に小説らしきに向かっていくという印象を受ける。ただ、この後、見つけた長い髪を根拠に太郎を問い糾すお婆ちゃんと太郎のやりとりは、サスペンス調をねらいすぎて大失敗に終わっている。

資料3 学生Aの作品 中盤

私は食べ終わった食器を片付けながら、後ろでテレビを見てクスリと笑っている太郎に声を掛けました。

「太郎は誰かお付き合いをしている人がいるのかい」

私がそう聞くと太郎の笑い声が止まりました。

顔だけを私の方に向けて

「急にどうしたの」

と微笑みながら言いました。そうしてまたテレビの方へ顔を戻

すのです。

恥ずかしいのだろうか私は思い、片づけを再開しました。その時私は気付いてしまったのです。同時にそれは私の考え過ぎだろうとも思いました。しかし過去の経験がそれを無視することを許してはくれません。私はシンク下の棚の取手部分に掛けていたタオルで手を拭き、今度はこう声を掛けました。

「太郎、もしかしてあんた人を殺したのかい」

今度は振り向くこともなく「ああ、殺したよ」と一言呟いただけでした。

それ以上口を開くことはなく、そのまま膝を抱えじっとしている孫の姿は、片づけられた部屋をより一層広く見せ、テレビの音だけが空しく響くだけでした。

① 食器を片付けながら、後ろで……。部屋の構造と二人の動作がちぐはぐ。狭いワンルームマンションだから二人は部屋の中央付近の折り畳みテーブルか何かで食事をした。そしてお婆ちゃんは自分の後方でテレビを見ている太郎の気配を音声でキャッチしている。だからこれは食器を「片付けながら」というよりも「洗いながら」と限定した方がよい。

② 顔だけを私の方に向けて。お婆ちゃんは太郎に背を向けて食器洗いをしていたはず。だから太郎が顔だけを私に向けて微笑むのをキャッチするには、「太郎は……」と声をかけた時点で手を止めて太郎の方を見ているはずである。それを描写したい。

③ その時私は気付いてしまったのです。何に気付いたのかは数行後ろで「太郎が人を殺したこと」と解釈できる。しかし、なぜそう判断できたのが不明。また、それ（＝太郎が人を殺したとい

う推理)が考え過ぎだとする理由根拠も不明。敢えて言えば身内可愛さの感情と言えよう。そしてさらには過去の経験も不明。実はこれこそ、学生Aが練りに練った設定らしいのだ。先に読み進むと、お婆ちゃんは元警察官だということが太郎の口から語られる。また、拭き取ったものの床にわずかに残った血痕にもお婆ちゃんが気付いていたことがお婆ちゃんの口から語られている。したがってこの場面が曖昧過ぎて意味不明になっているのは、学生Aがここを伏線として読者に引っ掛かりを持たせ、後でそれを解明する手法を狙っていたということなのである。作品中に伏線を張るだけの凝った設定を考えるようになっただけの進歩を認めてやりたい。ただし、実はお婆ちゃんが元警察官だったとか、血痕を発見していたというのは、「後出しじゃんけん」的な設定のようにも受け取れてしまう。

- ④ 人を殺したのかい。ああ殺したよ。なんともリアリティのない会話である。前夜か今朝か、ほんの数時間前に女を殺した男が平然としてお婆ちゃんの来訪を受け入れるのも不自然だ。ましてや女が使ったコップを、簡単に目につく場所に置くのも不自然。床の血痕を拭いたのなら長い髪の毛も雑巾で拭き取れそうに思われる。殺したのかと聞かれて、あっさりそれを認めてしまうのも変だ。まるで尻尾を捕まれるのを待っていたようにも思える。さらにはこの後で、死体は風呂場に放置していたという描写が出てくる。いくら身内といえども死体をどこかに処理するまではお婆ちゃんを家には入れられないだろう。推理小説とかサスペンス小説を書くことの難しさをまざまざと教えられたように私は思った。

- ⑤ このように失敗が目立つこのシーンの描写だが、最後の部分は

見事だ。膝を抱えじっとしている孫の姿が片づけられた部屋をより一層広く見せている。「孫」ではなく「孫の姿」を主語にすることによって、一回目の授業で教えた無生物主語構文の手法が生きている。また、膝を抱えれば身体は縮こまるから、男の身体も小さく見え、部屋は広く見える。殺人に手を染めた孫の後悔の思も象徴される。テレビの音だけがという、聴覚による描写への切り替えもうまい。視覚による描写ばかりに偏らないようにという三回目の授業で教えた内容もここで発揮されている。

壮絶な討ち死にのようなレポートであったが、今までの授業の成果や学生Aの意欲的な設定が随所に見られる。行数も四十七行に一気に増えた。ほんの数行しか書けなかった四月の頃がうそのようである。この論文に述べたような厳しい指摘でレポート用紙は真っ赤になって返却されたが、いくつかのいい芽が出て来たレポートであることも指摘してあげた。

#### 第七回授業 海や浜辺の描写

第七回授業では北杜夫の「どくとるマンボウ航海記」を題材として、海の描写や港町の描写を学んだ。海の描写においては、海の色描写はもちろん、天気、時間、地域による変化や違いも味わわせた。また港町の描写においては、そこを行き交う人間の描写にも注目させた。情景描写は、単に情景を美しく印象的に描き出すだけのものではない、時には人物の心理を象徴することもできるし、心理に大きな変化をもたらすきっかけとしても利用できるといったことを学ばせ、それを創作に活用させた。前回がお婆ちゃんと孫のやり

とりといった極めて現実味の濃いものだったので、今回は次のようなファンタジック・コメディに挑戦させることにした。

資料4 第七回授業 レポートのお題

お題 彼の名は浦島太郎である。「竜宮城で乙姫様がお待ちです。

背中にお乗りください」と言われ亀の背中に乗った。適宜設定を補い、竜宮城に向かう太郎が見た情景と心情を描写せよ。

条件①ナレーター目線の面白さを発揮すること。

②浜辺・沖・水中・深海などの海の様子を描くこと。

③太郎と亀のやりとりを描写すること。

④竜宮城に到着したところで終わってよい。

浦島太郎のパロディである。ストーリーは初めからできているようなものだが、かなり自由に設定を追加することができる物語であり、六回目の授業まで、ひたすらリアリズム小説のレポートを書かされてきた学生にとって、息抜きになるレポートである。毎年いくつもの面白い作品が寄せられてきた。前回の授業の最初で、前々回の授業のレポートを返却する際、三人称小説における語り手の自由度について説明してある。語り手はナレーターであり、ナレーターなりのコメントを入れると小説がぐっと面白くなる。芥川龍之介や太宰治がよく用いた手法である。これを略して「ナレコメ」と言う。条件①はそれを踏まえたものである。レポート作成開始にあたって、ナレコメをふんだんに使うよう助言しておく。

条件②については、今までの雨の描写や陽射しの描写と同様に、視覚的な表現だけでなく、聴覚、触覚、嗅覚なども用いるよう注文

を付ける。

条件③については、まず会話をたくさん入れること、次に太郎は太郎らしく、亀は亀らしく描くこと。特にそれぞれの年齢まで想定して、年齢差が出るように描くと面白いことをヒントとして与える。すると例年の傾向として太郎を若者、亀を老亀として描く学生、及びその逆の学生とに別れるから面白い。

なお、条件には明示していないが、時間崩しの技も十分にねらえるお題である。

資料5 学生Aのレポート 冒頭

「浦島さん、見えてきやしたぜ」

静かな深海に不自然な声が響く。

太陽の光が届かないそこは、真っ暗というわけでもなかった。

青や黄色といった単色から七色に色を変える何か独自の進化を遂げた不思議な生き物たちが、生きるために光を放っていた。

「あそこにひと際大きな建物があるでしょ。あれが竜宮城ですぜ」

そう話す亀の背中に乗った浦島と呼ばれた青年は

「……………」

口を動かすも、それは音として発せられることはなかった。しかし先ほどまでとは違う驚きと感嘆の声を漏らしていた。

数時間前。

砂浜に寄り添うように打ち寄せる波は白く泡立ち、しかし打ち寄せられた砂浜は黒く波の一部を飲み込んだ。

以前に時間崩しを教えた際、結果からの書き出し、山場からの書き出し、会話による書き出しも、併せて教えておいたのだが、学生Aは竜宮城が見えて来たときの亀の台詞から書き始めている。創作力のある学生に確実に追いついてきていることを窺わせる書き出しである。以下、長所短所について見てみよう。

① 太郎の無言の台詞「……」 前回の授業で激しい喜怒哀楽は短い台詞で示せ、ということをおいた。その際、無言の台詞を用いるのもその一種であるということも言い添えた。それがしっかり活かされている。またこの無言の太郎の心境は、直後の「先ほどまでとは違う驚きと感嘆の声」という描写でしっかりと裏付けられている。直前の亀の台詞も併せてみると、目的地が見えて来た安堵感、竜宮城の大きさや美しさに圧倒された思いなどであろう。それと対照的な「先ほどまで」の思いは、時間崩しの手法によって、この後の浜辺を出発する時の心理や、次第に深海に潜っていくときの心理などしっかりと描かれていた。

② 亀の口調。前回の授業の後半でこのレポートを課した際に、太郎は太郎らしく、亀は亀らしく、できれば対照的に描くと良いとヒントを出しておいた。それが亀の口調にしっかりと表れている。「きましたよ」と言うべきところを「きやしたぜ」、「ですよ」を「ですぜ」と表現したところには、亀をキャラ的にも年齢的にも余裕のあるものとして、太郎よりも優越的な立場で描こうという構想が伝わってくる。一方太郎は安堵の心理さえ明確な言語で語れないほど、まだ緊張が抜けきれないように描かれている。太郎は若く、また引っ込み思案で消極的な頼りないキャラかとの想像が浮上する。このように、さりげない短い会話で人物のキャラや相互関係、特に力関係を描くという手法は、プロが常に用いている創

作上極めて重要な手法だと私は認識している。学生Aがその手法を取り入れ始めたことを褒めてやりたい。

③ 砂浜の情景描写。穏やかで平和な浜辺の描写である。ただし、「寄り添うように打ち寄せる」という描写は、「寄る」という語句の重複が惜しまれる。さざ波の描写であるから「砂浜に寝そべるように打ち寄せる波」などとして、だぶりを解消したい。「打ち寄せられた砂浜」という描写も未熟である。論理的には砂浜が打ち寄せられた（合理的にはあり得ないことだが）かのように取れてしまう。「白く」と「黒く」の対照を狙っているのであるから「白く染められた砂浜は、次の瞬間には黒く波の一部を飲みこんだ」と改めるとよい。

資料6 学生Aのレポート 中盤

空は薄暗く海水浴に打って付けの天気ではない。それでもサーファーや地元民の一人や二人いてもおかしくないはずだった。むしろそれが普通で、実際亀が現れるまでは青年以外にも人がいたのだから。

「おーい、生きてるか、旦那ぁ」

「あ・・・ああ、一応」

「そりゃよかった！ あんたが死んだら俺が怒られてしまうからね」

意外と自分の身の安全を気にする亀であった。青年のことを気にせず話を進める亀。

「話をもう一度だけまとめませ。旦那、よく聞いてくれよ」



- ① いきなり話を現代的にしてサーファーを登場させるところは、創作に対する苦手意識が消えて来たことが伝わってきて微笑ましい。また、日本語が話せる不思議な亀が現れるまでは、ごく当たり前の日常世界がそこにあったことが描かれている。物語が不思議な展開にさしかかったところで主人公と副主人公以外の人物を消している。これは芥川龍之介が「羅生門」で用いた手法である。
- ② 「旦那あ」、「ああ」の小さな「あ」。何てことはない台詞に思えるが、このように音声がかえってくるような描き方は、多少の訓練を積まないと素人にはできない描写法である。「旦那あ」の方は語尾が伸びて長音化する直前の感じ。太郎にイエスの返事を求めているニュアンスである。「ああ」の方は、きっぱりと肯定の返事ができず、ためらっているニュアンスである。
- ③ 「あんたが死んだら・・・」。八回目の授業で「活かせ会話と独白 自称・対称・語尾」という手法を教える予定であったが、学生Aに先取りされた。天晴れである。対話を描く際は、人物が自分のことを「私、あたし、僕・俺・おいら・我、吾輩」などのうちのどれを用いて名乗り、相手のことをどう呼ぶか、しっかり計画を立て、それが無意識のうちにならなければならない必要がある。(もっともこれは初心者の注意点である。夏目漱石などは、感情の高ぶりに応じて、主人公が相手を「婆さん」から「年寄り」に思わず呼び変えてしまうような手法を使っている。)学生Aが太郎を呼び亀に「あんた」という対称を用いたのは周到な作戦である。「ですぜ」という語尾とも呼応する。「おーい、生きてるか」という、丁寧語を排除した言い方とも呼応している。すべて亀のキャラ及び年齢の優越性を表現するものである。
- ④ 地の文の「青年」という呼び方。人物相互の呼び方だけでなく、

三人称小説においては語り手が登場人物をどう呼ぶかという点も、読者の登場人物像を左右する重要な勝負どころである。多くの学生が「浦島」や「太郎」を用いているが、学生Aは冒頭で「浦島と呼ばれた青年」と紹介した後は「青年」を用い続けた。これはベテランの亀とは対照的に太郎の若さを強調し、引っ込み思案なキャラとも呼応させる手法である。

⑤ ナレーター目線の面白さ。この点は今回のレポートを課す際にしっかりと説明しておいた。学生Aは五か所もナレーターコメント(ナレコメ)を使用した。この中盤の抽出部分においては「意外と自分の身の安全を気にする亀であった。青年のことを気にせず話を進める亀」という部分がそれに当たる。陽気でお調子者のように描かれている亀であるが、それを皮肉るようなナレコメは、小説が単調になるのを防ぎ、読者の共感を誘って批評的に小説を味わう面白さを教えてくれる。

授業回数でいくとちょうど折り返し点となる七回目の授業のレポートで、学生Aの、書けないというコンプレックスはほぼ解消されたと感じた。作戦を練って、創作することを楽しんでいる。この論文の抽出部分だけではそれが十分に伝わらないのが残念なほどである。レポートの行数から見ても、前回からさらに増えて、六十九行になった。中でも太郎と亀の台詞は合計二十一に及び、全学生の中でも最も多かった。対話を通して人物の心理を描き、人物相互の人間関係を描き、ストーリーも進められるようになったのが大きな収穫である。

## 第十一回授業 家族愛憎の心理を描く

この授業では、さくらもこのエッセイ集「もものかんづめ」「さるのこしかけ」「たいのおかしら」の、初期三部作を紹介し、その中の「お見合い騒動」というエッセイを通して、愛情で結ばれているが故に起こる家族の憎み合いの心理の描き方を学ばせた。これを踏まえ、小学生の男兄弟の愛憎を描く創作に挑戦させた。

## 資料7

## 第十一回授業 レポートのお題

お題 僕は小学三年のトシ。傘を広げて昇降口をちょっと出たところで、後ろからタカ兄ちゃんの声がした。振り向くと兄ちゃんはニコニコして僕の傘に飛び込んできた。・・・兄ちゃんの足はどんどん速くなる。僕は必死に食らい付いていった。しばらくして家に着いたとき、僕は兄ちゃんよりもビシヨ濡れになっていた。適宜設定を補い、この状況とトシの心理を描写せよ。

条件①トシを「僕」として心理の変化を描く。

②タカの意図や心理も描く。

③年齢差のある男兄弟らしさを出す。

④「僕」が玄関を入ったところで終了。

大人になる前のさくらもこの話をエッセイで学んだのに合わせて、今回の登場人物は小学生にした。ただし、十一回目の授業ということで、難易度を上げて男の子を描かせる。兄のタカについては学年を指定していない。これはストーリーに応じて年齢差、体格差

をうまく利用できるかを見るためである。小学生は一年生でも体格はだいぶ違うが、ここではタカを五年か六年に設定するとよい。

条件①は一人称小説とすることを要求している。これは前回の十回目の授業で、男子高校生を主人公とした三人称小説を書かせたので、それとのバランスを取るためである。

条件②は、一人称小説ということ、トシ中心の描写になり過ぎないための牽制である。これは意外と難しいもので、トシの目線を貫きながらも、トシがキャッチできたタカの意図や心理を描かねばならないのである。ただし、うまく設定すれば直接タカの意図を描くことができる。台詞の活用である。タカに自分の行動の意図や心理を言わせてしまえば、いちいちトシが詮索する必要もない。また、「兄ちゃんはある言っているけれど、本音は違うんじゃないか」といった二人の人物の精神的なぶつかり合いも描ける

条件③は「僕は兄ちゃんよりもビシヨ濡れになっていた」というお題を実現するためのヒントである。年齢差はまず体格差や歩幅の差、そして歩くスピードの差で描きたい。また、小・中学生段階の男兄弟というものは、弟にとっては兄は抵抗し難い大きな壁のような一面がある。毎年このお題のレポートについては、兄に向かって対等に口論したり、ため口をきいたりする弟を描く学生が絶えない。この点についてはレポート作成前には伏せておく。返却する際に、男兄弟の支配服従関係を説明し、自分の経験できない男の子の世界を思い描けるのが優れた創作力だと教えている。

資料8

学生Aのレポート 冒頭

傘を持っていた僕がどうして濡れているのか。僕は玄関でそんなことを思いながら、お母さんが持ってきてくれたタオルで体やランドセルを拭いた。

数十分前。

「皆帰るの早いなー・・・」

昇降口を出ると雨が降っていた。弱くもないし強くもない。特徴のない雨だった。

「借りるぜ」

「あっ」

不意に声が聞こえたと思ったら、ひょいと僕の傘が手からなくなっていた。

「兄ちゃん、傘返してよ」

「一緒に帰るんだ。俺が傘持った方がいいだろ」

そう言いながら兄ちゃんは僕の傘を持ってどんどん先に歩いて行く。

「そうじゃないよ。兄ちゃん自分の傘はどうしたのさ。お母さんが朝、『傘持ってけ』って言ってただろう」

「ああ、傘なら壊れた」

「はああああ？！」

「登校中、リョウヤに会ってな。そしたらあいつが『勝負だ、タカ』とか言うもんだから、えい、やー、とおーって」

学生Aは「時間崩し」がかなり気に入ったらしく、主人公の心理

から書き始めたり、台詞から書き始めたりと、多彩な時間崩しを用いるようになった。彼女の時間崩しの特徴は、第一段落を手短に締め括り、一行空けて「数十分前」などと明確に時間を遡らせるところにある。以下長所短所を織り交せて分析してみよう。

① 自称の違いによる兄弟の年齢差の表現。お題で弟のトシは自称として「僕」を使うように限定されている。それに対して兄のタカの自称は指定されていない。何となく書く学生は、兄の自称も「僕」としてしまっただが、書き慣れた学生なら「俺」を使うことができる。男の子がいつ頃から「僕」を「俺」に代えるのかは創作上面白い問題である。個人差があるうが、早く見積もって小学校高学年、遅くとも中学三年ぐらいであろうか。タカを小学五年か六年と設定すれば、「俺」「僕」の使い分けでいちいち断らなくても発言者がどちらであるかを読者に伝えることができる。学生Aがそれを活用できたのはいい成長ぶりを示している。

② 冒頭の心理の不自然さ。「僕がどうして濡れているのか」とトシは自問しているが、その理由が分からないはずはない。兄が無理やり傘の中に侵入して来たからである。ましてや兄がどんどん速足で歩いたら、スピードの遅い弟が遅れて傘の外にはみ出すのは当然である。だから冒頭でのトシの疑問は、疑問形を借りた怒りの表現でなくてはならない。「どうしてこんなに濡れなきゃいけないの」としたい。また、続く「そんなことを思いながら」も冷静なニュアンスが漂ってしまい、トシの怒りが伝わって来ない。「そんな怨みをむしり取るように」とすると「拭いた」という述語にうまく呼応する。

③ 脇役の追加設定。九回目の授業で「脇役はスパイス 味方・無関心・敵」という手法を教えておいた。書き手はどうしても主人

公中心にストーリーを進めたくなる。もしくは副主人公を絡めることによって主人公の心理を浮上させたくなる。しかしここに脇役（むしろチョイ役と言っても良い）をうまく利用すると、鏡に映し出すように主人公の心理を照らし出すことができる。脇役がスパイスのように小説の味を引き出すのである。学生Aはこのレポートにおいて、最初と最後に母親を登場させている。惜しむらくは母親の発言や、表情・行動の描写がない。それがあってもっと面白くなるのだが、ともかく、母親という脇役を登場させて主人公を救済させたところには、母親頼みの小学三年生らしさがよく出ている。

④ 口調の違い。兄は兄らしい、しかし弟はやや弟らしさを欠く。「借りるぜ」「いいだろ」など、兄は文字通り「上から目線」で弟を見下ろすような言葉遣いである。一方、弟は「返せよ」ではなく「返してよ」、「違ふよ」ではなく「そうじゃないよ」など、どことなく遠慮がちで歯切れが悪い。以上の点を見れば、口調による年齢差、兄と弟の力関係の差は表現できている。ただし、「自分の傘はどうしたのさ」「言ってただろう」は、兄を詰問し、責めている感じで、よほど民主的な兄弟関係づくりを意識して育てられた家庭の兄弟でない限り、弟が兄に向かってこういう口の利き方をするのは難しい。「どうしたの」「言ってたよ」がふさわしい。また、母親の発言が引用されているが、『』を付けた場合は、その中の発言は直接話法になるので、実際に母親がこういう口調で発言したことになる。こういう母親もいないわけではないが、「傘持ってたのよ」とか「傘忘れちゃだめよ」ぐらいにしておいた方が無難であろう。あるいは、『』を取り去って間接話法にする手法も考えられる。

⑤ 兄が傘を持っていない理由。学生たちはいろいろな原因を設定して来る。家に忘れたという案。母親の忠告を聞かず、最初から持って来る意志がなかったという案。傘を忘れた（憧れの）女子に貸してしまったという案。そして壊れた、または壊したという案。学生Aの考えた、いわゆるチャンバラごっこをして壊してしまったというのはいかにも小学生の男の子らしい。ただし壊れたとはいえず、それを学校に放置して弟の傘に侵入して帰るといっては、やや現実味を欠く。壊れた傘を親に見せねば新しい傘を買ってもらいにくいわけだから、壊れた傘をタカに持たせておくといふ。「ああ傘なら壊れた」と言いながら、ひん曲がった傘を弟の眼の前に突き付ければよいのである。

⑥ 一緒に帰るんだと言いつつ、ほとんど先に歩いて行くちぐはぐさ。体格差、歩幅差から弟が兄に遅れがちになることは理解できる。しかし、ここでの兄は全く弟と一緒に傘の中に入る気持ちがないように描かれてしまっている。「借りるぜ」という兄の最初の発言からしてそんなニュアンスである。最初に「助かったぜ」とか「仲良く帰ろうぜ」などと言わせるとよい。また、「ほとんど先に歩いて行く」は「兄ちゃんのペースで歩き始めた」ぐらいでよいだろう。

資料9 学生Aのレポート 中盤

「あ、兄ちゃん待ってよー」  
少し気を緩めたせいとか、いつの間にか兄ちゃんは僕よりも数メートル先にいた。  
身長差のせいで歩幅が合わないのだ。それなのに兄ちゃんは僕に

合わせてくれない。そのせいで僕は早歩きをするけど、やっぱりちょっと遅いからランドセルなんか既にびちょびちょだ。

「あ、やべえ」

五時のチャイムが鳴った。同時に兄ちゃんが何かを思い出したかのように歩く速度を速めた。

「どうしたんだよ。待ってよ兄ちゃん！」

「アニメが始まっちゃった！ 急げ！」

そう言って兄ちゃんは僕の傘を持ったまま走る。

「あ、待ってよ・・・兄・・・兄・・・ちゃん・・・はあ・・・」

① 見えないはずのものが見えてしまう。よくやるミス。 三人称小説の場合、語り手は全てをお見通しの神様みたいなものだから、主人公の背後にあるものだろうが、心の中だろうが、遠く離れたところにいる別人の状況だろうが、何でも描けてしまう。しかし、一人称小説の場合は、そうはいかない。語り手は主人公自身なのだから、主人公が背中に背負ったものがどうなっているかは、下ろしてよく見てみないと正確には分からないはずである。雨の中、早足で歩く兄を必死で追いかけている弟が、ランドセルを途中で下ろす余裕はない。ランドセルが濡れているであろうことは想像できても、「既にびちょびちょ」という、濡れ始めた時期と、塗れ具合は描けない。「心配になって背中に手を回してみると」というような表現を挟んで、眼ではなく手で確かめた表現に改良したい。ついでに言えば、「既に」は「もう」に改めて小学三年生の語り手らしさを出したいところである。

② 足を速める兄の意図を描く。お題に「兄ちゃんの足はどんどん速くなる」とあった。これをどう解釈し、どう設定するかは学生

の腕の奮いようである。一本調子にだんだんと速くなったと設定する学生よりも、何かの拍子にガクンとスピードがアップしたと設定する学生が多い。その理由として使われるのが、見たいテレビ番組の開始、学習塾に遅れそう、スイミングクラブに遅れそう、友達の家で遊ぶ約束などである。意地悪な兄がゲーム感覚でスピードを上げたり下げたりするという設定をする学生もいる。学生Aはテレビ番組方式を選んだが、これは学習塾方式などと比べて兄の身勝手さがよく出てくる。いい設定だったと言えよう。

③ きっかけの作り方。兄が見たいテレビ番組を思い出すきっかけとして「五時のチャイム」を持ちだしたのは良いアイデアだ。ただしこの場合のチャイムは学校のものではなく、市役所かどこかで子供の帰宅を促すための放送のことであろう。地域によっては「夕焼け小焼け」か「ふるさと」のメロディに乗せて流す定番の放送である。チャイムが鳴った瞬間に兄が「あ、やべえ」と叫ぶところはどうまい。以前、「激しい喜怒哀楽は短い言葉で」と教えておいたのだが、見事に結実している。何に驚き、心配しているのが不明な「あ、やべえ」だけをまず兄に言わせ、「どうしたんだよ」と聞かれて初めて「アニメが始まっちゃった」と理由を言わせる演出にはリアリティがある。

④ 喜怒哀楽の短い台詞。短い台詞と言えば、右の最後の「あ、待ってよ・・・兄・・・兄・・・ちゃん・・・はあ・・・」も面白い。「兄」と「ちゃん」を切り離れたのは、ちょっとやり過ぎという感がなくもない。でもこれは、ただでさえ息の上がりかけた弟に、驚きの心理を加えたいという学生Aの意欲と作戦を感じさせると、「はあ」のため息の一言も、心理の描写としては曖昧なのだが、論説文のような明確な文は、小説には向かないということも第一

回の授業から何度も教えていることである。ここは読者が弟の落胆を感じ取ってもよいし、疲れを感じ取ってもよい。そういう場面である。

今回のお題には、小学三年生のトシが、なぜ高学年の兄と帰りが一緒になるほど遅くまで学校にいたのかという、設定上の問題点がある。ほとんどの学生は何も考えずにこの点をスルーしてしまうのだが、毎年若干の学生がこの点に気付き、レポートの中でその経緯を設定してくれる。例えば学級の係の仕事を先生と共にやっていて遅くなったとか。あるいは友達と遊んでいたとか。学生Aは図書館で読書していたと設定した。こういう隅々まで気付いて設定ができるという点でも、この学生の成長ぶりを評価したい。「絵と同じ。小説を書き出す前にストーリーをデッサンせよ」ということも何度も言ってきた。それをよく受け止めてくれていたようだ。分量的にも今回は五十九行。平均して六十行は書ける力がついてきている。

### 第十三回授業 服従と反抗の心理を描く

全十五回の授業も終わりに近づいた、この日の授業では、中島敦の「名人伝」を軽く取り上げた後、「牛人」という、あまり知られていない隠れた名作の全文を取り上げ、師弟や親子における支配服従の関係から生まれる忍従・反発・反抗の心理や行動の描き方を学ばせた。そしてレポートのお題には、お爺さんを主人公兼語り手とし、妻、息子、息子の嫁、二人の孫という五人の脇役をフルに生かしたストーリーの展開を描かせた。狙いは女子学生の経験しようがない男性の、年寄りの心理や言動がリアルに描けるかどうかを見る

こと。また、一家団欒の場面で、そこにいる人間全員をうまくストーリーに活用できるかどうかを見ることにある。

#### 資料10 第十三回授業 レポートのお題

お題 わしは七十歳のじい。小学五年の孫、じゅん(潤)の誕生記念日焼肉パーティということで久しぶりに息子夫婦に呼んでもらってばあさんと訪ねた。ところが、肉は初めに二枚回してくれただけで、嫁の聖子はその後野菜をじゃんじゃんプレートのわしらの前に回してくる。おいしそうなカルビはどんだん中一のさとし(智)やじゅんの口に消えてゆく。聖子よ、お前が肉を寄こさぬならば百戦錬磨のわしの話術でゲットするまでじゃい。適宜設定を補って、この状況とわしの心理を描写するんじゃよ。

条件①じい目線で、肉をゲットするじいの話術を描く。

②それまでのじいの心理を描く。

③肉をよこさぬ聖子の意図や心理を描く。

④その他の脇役を活用する。

孫の誕生パーティなのだから、主役の孫とその兄に嫁がどんだん肉を振る舞うのは何ら不思議ではない。ましてや育ち盛りの男の子ならなおさらである。しかし、核家族の主婦である聖子にとって、久しぶりに招いた舅、姑はお客さんでもある。この二人にも歓待の意を表さねばならないはずだ。だから聖子は初めに焼き立ての肉二枚を二人に振る舞っている。ならばその後、どうして肉を振る舞わないのか。ここはいろいろな想像ができるところであり、学生たち

の腕の奮い所である。

毎年最も多い設定はおじいちゃんが高血圧とか糖尿病とかで、脂っこい食品を制限されているというもの。中には最近症状がよくないということで、おじいさんに肉をあまりあげないよう婆さんが聖子に、連絡し、女二人で示し合わせていたというものも。これに近いものとして、おじいさんの虫歯や歯槽膿漏を理由とする者もある。

また、以前この家で焼き肉だのスキヤキだのをやったとき、じいさんが肉を喉に詰まらせたという「前科」を持ちだす者もいる。

あるいは、孫二人が大の野菜嫌い、過保護な聖子がそれを結果的に容認してしまっているという設定もある。

いずれにしても聖子の意図的な悪意を設定する者は少ない。

誕生パーティーに付き物の大きなケーキをじいさんが食べられるよう、焼肉部分では肉を控えさせる聖子の配慮だったという設定もありうるが、なぜか過去六年、こういう設定をした学生は一人もいない。女子学生にとってケーキは別腹で、そんな心配は思いもよらないということなのだろう。

ストーリーはおのずと聖子の「悪意」と思い込んだじいさんが、負けてなるものかと対抗心をメラメラと燃やし、なおかつあからさまに戦うのではなく、自然に肉が回ってくるようにチャンスを窺い、見事な話術で仕留めるといふものになる。

気をつけなければならないのは、婆さん、息子、二人の孫をどう使うかという点である。毎年、婆さんや息子が一言もしゃべらずにひたすら食べ続けているストーリーになってしまふ者が何人かいる。

では学生 A の作品紹介もこれが最後となるので、ノーカットで紹介

介しよう。息子と婆さん（妻）の存在が薄いのが難点だが、その他の脇役は十分に活用して、一家団欒のパーティーの中でのおじいさんの作戦が面白く繰り広げられている。

資料11 学生 A のレポート 全文

肉の焼ける音。香ばしい匂い。しかし、今わしの目の前にあるのは野菜。孫の誕生記念に焼肉パーティーと聞いて来てみたものの、これでは焼き野菜パーティーである。

「お父さん大丈夫ですか？ 箸止まっていますけど・・・」

「ん？ ああ、大丈夫。ちょっと考え事をしていな」

「まだまだ沢山あるので遠慮しないでくださいね」

聖子さん、沢山あるのは野菜ですかい？ わしらにばかり野菜を回しおって。

ああ、肉が智や潤の口へ吸い込まれてゆく。

こうなったら・・・

「智、潤、肉ばかり食べないで野菜も食べなさい。栄養が偏るぞ」

「えー」

「俺、野菜嫌い」

「いつもこんな感じで野菜出しても食べないんですよーなるほど、どうせ野菜を回しても食べないからこちらに回すのか。」

「何で野菜が嫌いなんだ？」

「苦い」

「何かたまに硬かったりするー」

よくあるやつだな。

「聖子さん、普段野菜はどのようにして出しているのかな？」  
 「え、普通に、サラダですけど・・・」  
 「甘い、甘いぞ、聖子さん。お主が甘いから野菜が苦いんじゃないや。」  
 「智、潤。騙されたと思ってこの葱を食べてみなさい」  
 「よりにもよって葱かよ」  
 「そう言えば、智は葱が一番嫌いじゃったな。」  
 「ほら、聖子さん」  
 「え、ええ」  
 「よし。これで少し野菜が動いたな。」  
 「俺は食べないからな」  
 「智らしいな。潤は・・・やはり食べようとしないか。ならば・・・」  
 「その葱を食べたら百円やろう」  
 「ほんと？」  
 「くいついた。」  
 「本当だとも」  
 「迷ってる。迷ってる。お。箸で摘まんで、それをそのまま・・・」  
 「あれ？ 甘い！」  
 「ほんとだー」  
 「驚いているな。聖子さんもびっくりしている。」  
 「葱の辛味ってのは、煮たり焼いたりすることで消えるんだよ」  
 「初めて知りました」  
 「他にも、焼くことによってやわらかくなるのが、この人参とか。生のサラダだと、どうしても子供が毛嫌いしてしまう。調理法を工夫することで食べやすくなるぞ。あと、肉ばかりだと栄養が偏ってしまうからな」  
 「へえー」

「しかもわしが作った野菜だ。もっと食べなさい」  
 「はい」  
 「二人はしぶしぶ感じてしたが、これで聖子さんが動かないわけがない。何と言っても彼女は母親であり、我が息子の嫁だからな。」

① 全体的に大人しい書き味。他の学生の多くは、肉を回してよこさぬ聖子に対するじいさんの怒りの炎を燃え立たせ、聖子は聖子でじいさんの魂胆に気付いた上で頑として応じないという設定をしてくる。少し聖子を弱気に設定する学生でも、聖子が困ったように婆さんを見ると、婆さんは示し合わせたようにじいさんに何らかの理由を持出して野菜を食べよう促す、といったものが多い。

一方、学生Aはじいさんを一応怒らせてはいるが、沈着冷静に、理路整然と二人の孫に野菜を食べるよう促させている。聖子も拍子抜けするほど従順である。我が子に対しても野菜嫌いを追認してしまっているほどの大人しさである。小説を書くとき、知らず知らずのうちにストーリーや人物のキャラづくりの上で、書き手のキャラが反映してしまうのだと痛感する。柔和で大人しく、悪く言えば気弱な平和主義者といったキャラの学生Aらしさがたつぷりと溢れ出ている。

② お題の解説のところ、「毎年、婆さんや息子が一言もしゃべらずにひたすら食べ続けているストーリーになってしまふ者が何人かいる。」と述べた。学生Aの場合も、婆さん（妻）と息子が一言もしゃべっていない。眼の前で繰り広げられる野菜論争を聞きながら、一言もしゃべらずに食べ続けていたのか。これはあり得ない。また箸を止めて四人の議論に耳傾けていたのか。これも



あり得ないだろう。条件④として「その他の脇役を活用する」と示しておいたにも拘わらず、ある脇役を無言で終わらせてしまったのは、学生Aの他にも毎年数名いるのだが、残念である。

③ 洒落に冗談。楽しんで書いている。読み始めてすぐに気づく微笑ましい表現は「これでは焼き野菜パーティーである」というじいさんの独白であろう。内心ムカムカしながらも、嫁の聖子の行動を揶揄する余裕がある。次に面白いのは「お主が甘いから野菜が苦いんじゃない」という「甘い」と「苦い」の取り合わせであろう。三つ目は「食べたら百円やろう」と言われて葱を食へ始めた孫たちに対するじいさんの独白「くいついた」。葱に食いついたという意味と、じいさんの仕掛けた作戦にまんまと食いついたという意味の両方が掛けられている。

④ 目でキャッチした情景だけに囚われない。学生たちの小説はどうしても視覚で捕えた情景描写に偏ってしまう。確かに人間の情景把握はかなりの割合で視覚に頼っているのだろう。しかし、料理や飲み物の例でも分かるように、我々は匂いや味や、堅さや柔らかさ、時には泡の弾ける音などでもおいしさを感じ取っている。学生Aの書き出しを見てみよう。「肉の焼ける音。香ばしい匂い」と聴覚、嗅覚による描写を対句的に重ねた書き出しは、何とも魅力的だ。この二言で一挙に楽しいパーティを想像させ、その直後に「しかし、今わしの目の前にあるのは野菜。」と、状況を暗転させる手法は巧い。

⑤ 一人称小説の良さを駆使したじいさんの独白。脇役たちとの会話の途中に、ふんだんにじいさんの独白が出てくる。十か所以上はある。読者は会話の描写を楽しみながら、じいさんの心の中に入り込むようにして、じいさんの思いを我が思いのように重ねて

味わわされてしまう。一人称小説において語り手兼主人公に批評的な発言をさせるといふ手法は、太宰治の好んだところであるが、学生Aの作品も徹底している。下手にやると会話の流れを止めてしまい、煩わしい小説に陥ることもある手法だが、この作品を見る限り、この手法は成功していると私は評価する。

⑥ 野菜の調理法に詳しいおじいさん。「葱の辛味つてのは、煮たり焼いたりすることで消えるんだよ」、「他にも、焼くことによつてやわらかくなるのが、この人参とか」などと、男性で、しかも年配者がこんなに野菜の調理に詳しいのは変ではないかと思われる展開が後半にさしかかったところで出てくる。この違和感は、少し後ろの「わしが作った野菜だ」という一言で解消する仕掛けになっている。読者は「なあんだ。そうだったのか」と疑問が解消するという仕掛けである。この構成技法も「後出しじゃんけん」と批判を受けるリスクがある。最初の段落に「わしらが持ってきた野菜とはいえ、これは多過ぎじゃろう」というような一言を入れておいて、後半で「わしが作った」と加えれば、「後出しじゃんけん」との批判は避けられる。小説というものは、ストーリーリーや登場人物に関する重要な情報を一挙に読者に示さず、少しずつ追加していくものである。この場合も冒頭から「わしが作った野菜を持って」と示してしまうとネタを示し過ぎになるし、クライマックスで「実はおじいさんが作った野菜だったんです」という示し方をする、「作者、ずるいよ」という批判を浴びてしまう。

⑦ 結局じいさんはどうやって肉にありついたのでか。学生Aには肝心の結論部分をしっかり書かず終わってしまうという悪いくせがある。十三回目のレポートでもこのくせが抜けなかった。たぶん本人は「聖子さんが動かないわけがない」というじいさんの予

測を描くことによって、聖子が野菜をプレートの子孫サイドに積み始めたということを読者に想像させようとしたのであろう。しかし、だからと言って「肉を受け取る人がいなくなったから、それをじいさんや婆さんに回そう」と思って聖子が肉を回してくれるかは保証できない。息子に回し始める可能性が否定できない。肉を焼くのを止めてしまうかもしれない。だからもう一言、二言じいさんの台詞が欲しい。例えば「最近、入れ歯安定剤を替えてみたら、これが抜群のフィット感なんじゃ、どれ、受け手の減った肉を咬んでみせようぞ」などと言わせて終わればよい。とは言え、「小説の結末を完璧に描き過ぎず、読者にこの先を想像させつつ筆を置く」という手法で締め括ろうとした学生Aの、この半年間の成長は褒めてやりたい。

#### 最終回の授業を終えて

最終回の授業で実施したアンケートにおける学生Aの回答は、一年前に紀要四十八号でも紹介した。それによると、彼女は作品の締め括り方の難しさを痛感し、それを自己の課題として認識している。右に示した私の指摘とも一致しているので、改めて回答の該当部分を紹介しよう。

#### 資料12 学生Aの最終回アンケート回答(抄)

##### ① 創作にチャレンジしての感想

書いてみたいと思いはするものの、一つの作品として完成することとはほとんどなかったので、授業で書くことができたのは、とても

良い経験だった。オチが難しいです。

##### ② 創作力が伸びたかどうか

書き方は少し分かった気がする。・・・書き始めや一部の場面はパッと出てきてもオチがイマイチ。自創作もオチのつけ方が上手くないです。

#### おわりに

二回にわたるこの論文では、ほぼ初心者の短大一年生に、どういう指導をすればどれだけその力が伸びるのかを、学生Aのレポートを中心として示してきた。年度初めには、三十分かけても数行しか書けなかった学生Aが、宿題として家に持ち帰って時間をかけて書いてきたとはいえ、様々な手法を用いてたっぷりと書けるようになったとの手応えが得られた。読解力と比べ、創作力を育成することとはた易くはないが、十分に可能であると私は確信した。

#### 参考文献

- 大沢在昌著 「小説講座 売れる作家の全技術」 角川書店  
 菅田龍一著 「小説を書きたい人の本」 成美堂出版  
 宮原昭夫著 「増補新版 書く人はここで躓く！」 河出書房新社